

先週の講壇から

“ 一緒にお泊りください ”

ルカによる福音書 第24章 第28節～35節

聖句「二人が、『一緒にお泊りください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いてい  
ますから』と言って、無理に引き止めたので…。」(24:29)

1. 《心は燃えても》 派遣神学生として、小学校3～4年のクラスを担当していた時、イ  
ースターで「エマオ途上の旅人」のお話をしました。旅人たちの「心が燃えた」という山  
場に差し掛かった時、4年生の女の子から「先生、自分が何を喋ってんのか、分かってん  
の?」とツッコミを入れられ、総崩れとなりました。自分の感動を伝えようと焦る余りに、  
子どもには全く届いていなかったのです。自分の心が燃えているだけでは、他人の心に何  
も伝わらないのです。
2. 《目が開けて…》 復活信仰こそが、キリスト教の真髄とされています。けれども、私  
たちは復活どころか、生きることも死ぬことも分かってはいないのです。キリスト者と言  
っても、いつも復活の希望と喜びに燃えている訳ではありません。むしろ、主の居られる  
エルサレムから遠ざかり、エマオへの道を重い足取りで歩く弟子たちと同じようなもの  
です。しかし、見知らぬ同伴者を招いて、食卓に着き、彼が祈りパンを分配した時、31節  
「二人の目が開け」たのです。「開ける」は、人間の努力や修行によるものではなく、自  
然と開かれたのです。ここに信仰や人生の醍醐味があります。32節「聖書を説明してく  
ださった」の「説明する」も「開く」です。主の晩餐と聖書の解き明かしがリンクしてい  
るのです。
3. 《覆われている》 確かに「心が燃えていたではないか」は印象深い聖句です。しかし  
「ベザ写本」では「ヴェールで覆う、包む、隠す」です。すると、二人の弟子は「私たち  
が、彼をイエスさまと分からなかったのは、道中、聖書の解き明かしを為さった時も、私  
たちの目が覆われていたからだ」と言っていた訳です。「心が燃えて」いるかどうかは重  
要ではなかったのです。少し暖かいくらいが良い塩梅です。むしろ、二人が「一緒にお泊  
りください」と言ったことの方が大切です。主は降誕の時から「泊まる場所がなかった」  
のです。けれども、そんなイエスさまの人生の最後に、人間が「お泊りください」と言っ  
て差し上げたのです。

朝日研一朗牧師